

《特別寄稿》

## 有機農家からみた日本の有機農業と 関係する思想家たち

館 野 廣 幸\*

### はじめに

有機農業という言葉や概念が、日本社会で一般的に認識されるようになったのは、それほど古いことではない。「有機農業」という言葉は、1971年に一楽照雄によって生み出された。一楽照雄は、当時、経済合理主義によって推進されていた農業の近代化に対して疑問を呈した。すなわち、工業的な経済性優先の思想に基づく農業の近代化は、農産物の画一的な大量生産と大量消費を目的としていた。こうした近代農法のあり方は、農薬や化学肥料などに依存せざるを得ない。一楽は、単なる農薬や化学肥料の毒性だけでなく、農民の生活基盤を破壊する近代農法の思想そのものが、人間社会や自然生態系の存続を危機に陥れかねないことを看破したのである<sup>①</sup>。

一楽が求めたのは、経済の領域を超えた大きな価値を有する本来の農業、あるべき姿の農業であり、それは、豊かな地力と多様な生態系に支えられた土壌から生み出された健康的で食味の良い食べ物を通して、自立した生産者と消費者が密接に結び付き、それにより地域の社会や文化の発展と、安定した永続的で幸福な生活の実現を図ることであった。一楽は、こうした社会全体の大きな変革の基礎となる農業あり方を「有機農業」と名付け

たのであった。

同時に一楽は、こうした社会運動の母体として1971年に「日本有機農業研究会」を設立し、同研究会を農業者と消費者のみならず、研究者や行政が同じテーブルで相互に対話する核として位置づけた。このように一楽が同研究会の名称として名付けた「有機農業」という言葉が、それ以降、日本社会全体に広まったのである。

### 1 日本の有機農業

#### (1) 困難な出発

1971年に「有機農業」という言葉とその理想が小さな産声を上げたとき、日本の農業のほとんどは、すでに農薬と化学肥料の洗礼を受けていた。戦後の食糧難を背景に、日本の農業政策は手段を選ばぬ食糧増産の路線を邁進して、それに疑問を抱かぬ農村を作り上げている状況にあった。多くの農民は、化学肥料による卓越した農作物の生育に驚嘆し、化学合成農薬による効能に歓喜した。化学薬品と農業機械が農業の未来を築いていくと信じきってしまっていた感があった。

そうすると、もはや、時間のかかる重労働の堆肥作りや地域に伝えられた在来品種を巧みに作り回す輪作によって病害虫を抑える技などを顧みる農民はほとんどいなくなり、堆肥づくりに適した

\* 栃木県野木町の有機稲作農家で、現在、日本有機農業学会理事、NPO法人日本有機農業研究会理事。筆者は、経済学部において、2008年度～2010年度までの特殊講義「有機農業と暮らし」と2011年度の社会環境設計論特論の非常勤講師を務められた。主な著書として『有機農業・みんなの疑問』（筑波書房、2007年）、『日本の有機農法』（共著）（筑波書房、2008年）がある。

平地林や茅場は住宅地と化し、農家の庭先から牛馬や鶏は消えていった。

有機農業が誕生したとき、残念ながら日本の農村には有機農業の基盤が失われていた。そうした当時の状況の中で、一衆と有機農業の実践者たちは、苦難の船出を余儀なくされた。有機を志す農業者は、その理想とは裏腹に、奇人・変人扱いされ、集落の共同体から排除されることもしばしばであった。

しかし、1980年代に入ると、経済優先主義による環境の地球規模での破壊は、誰の目にも明らかになってきた。先駆的な有機農業者と消費者たちの不屈の努力は、ここに至ってようやく、少しずつ人々から認められるようになっていった。

## (2) 慣行農家の有機農業理解

有機農業という言葉が普及するにつれて、有機農業は「有機質投入農業」であるという誤解が発生した。近代農業に有機質肥料を加えることが有機農業であると解釈されたのである。こうした有機農業に対する誤解は、とくに熱心な農業者に多くみられた。確かに有機農業は有機質を重視するが、それは資源循環と生態系の維持増進の手段であって、「有機質の投入」が有機農業の目的なのではない。特に1980年代後半から、食の安全や環境問題の高まりの中で市場には「自己流有機（有機質）農産物」が溢れた。その中には農薬や化学肥料を使って栽培された名前だけの「有機栽培」の農産物も多くあった。

こうした混迷の中で、政府は、1999年にJAS法（農林物資の規格化及び品質表示の適正化に関する法律）を改正し、有機農産物の基準・認証制度を導入した。これにより有機農産物の基準であるJAS規格が定められ、有機農家が農産物に「有機」と表示する場合には、その生産方法が有機農産物のJAS規格に適合したものであることを農林水産省に登録された認証機関によりあらかじめ認証を得ることが義務付けられた。この基準・認証制度は、偽装「有機農産物」の駆除には一定の効果を示したが、有機農家にとっては、認証を得るため、作物の生産から出荷に至る全過程が農薬・

化学肥料等の使用禁止資材により汚染されていないことを証明するための記録を残しておかなければならず、書類作成等の事務作業の負担が大きく、また、認証に必要な経費も負担させられるので、果たして有機農業を推進する効果を持つのか大いに疑問のある制度であった。

こうした状況の中で、有機農業の研究者や運動関係者は、この基準・認証制度により、有機農業が閉塞状況に追い込まれていることに危機感を持ち、2005年に有機農業を推進する法律の試案を提起し、それがきっかけとなって、2006年に有機農業推進法（有機農業の推進に関する法律）が全党合意の議員立法で提出され、国会で成立した。

## (3) 有機農業とは何か

有機農業推進法は、第2条において、有機農業について定義し、「この法律において有機農業とは、化学的に合成された肥料及び農薬を使用しないこと並びに遺伝子組み換え技術を利用しないことを基本として、農業生産に由来する環境への負荷をできる限り低減した農業生産の方法を用いて行なわれる農業をいう」としている。

この定義は重要であるが、筆者には、消費者や農業者のみならず、有機農業者においても、「化学的に合成された肥料及び農薬を使用しないこと」と「遺伝子組み換え技術を利用しないこと」だけが有機農業であるかのような皮相な理解を生む危険性があるように思われる。

有機農業で重要な点はむしろ、第3条の「基本理念」に示されている「農業の自然循環機能」の増進や「有機農業者」と「消費者との連携の促進」および「農業者の自主性」であろう。

これは、日本有機農業研究会が2000年に設定した「有機農業に関する基礎基準2000」<sup>(2)</sup>の「1有機農業のめざすもの」で示している理念である「自然環境と共生し生物多様性を守る」、「地域自給と資源の循環による地力の維持」、「生産者と消費者の提携に基づく人権と公正な労働の保障」、そして「生命を尊重する社会への価値観の変換による真に幸福で豊かな暮らしの実現」とも共通する。

つまり、有機農業とは、化学合成農薬・化学肥料・遺伝子組み換えの使用禁止というネガティブな思考ではなく、化学合成農薬も化学肥料も遺伝子組み換えも必要としない農業のあり方を求める積極的な思考であり、そのみならず、有機農業の持つ「共生」・「循環」・「提携」という生命尊重の思想とそれに基づく社会の実現こそが有機農業の本当の重要な理念であると捉えられるべきである。

## 2 有機農業と田中正造<sup>(3)</sup>

一楽照雄が自然循環機能に基づく農業の本来のあり方を「有機農業」と名付けた背景には、田中正造が少なからず関係している。田中正造は、足尾銅山による鉍毒の停止を訴えて天皇に直訴を行った人物だが、その正造の下に駆けつけたのが若き黒沢酉蔵<sup>(4)</sup>であった。黒沢酉蔵はその後北海道に渡り、「健土健民」の思想に基づく有畜循環農法を行ない、酪農を主体とする北海道農業の基礎を築くことになる。黒沢酉蔵が携えていた1895年（明治28年）5月の田中正造の日記には、正造が好んだと言われる中国の詩人文天祥の漢詩「正気歌」が書き留められているが<sup>(5)</sup>、その冒頭は「天地有正気（天地正気有り）」から始まる。黒沢酉蔵は、この言葉を自らの営農思想に活かし「天地有機（天地機有り）」と銘じた。

「天地有機」は、後に黒沢酉蔵を訪れた一楽照雄の目に留まることになる。のちに一楽は、この「天地有機」が本来の農業のあり方を「有機農業」と名付ける契機になったと語っている<sup>(6)</sup>。「有機農業」という言葉には、「天地」である「自然」の働きに則ることが基本であるという思想が込められていることは間違いないであろう。そして、この「有機」の思想は、田中正造の自然観である「天地と共に久しき二答へよ」<sup>(7)</sup>（1913年）とする思想とも一致すると考えられる。

### (1) 田中正造の農業観の変遷

田中正造は、江戸時代末期の1841年（天保12年）11月3日、下野国安蘇郡小中村（現在の栃

木県佐野市小中町）の名主の家に生まれた。現存する正造の生家の状況から察するに、名主とはいえ周囲の農家とさして変わらない慎ましい暮らしであったと想像される。正造は、農家として田畑を耕しながら、地域のまとめ役としての職務も行なうとともに、地域代表としての人格も要求されていた。

田中正造が自らの半生をつづった『田中正造昔話』（1895年）の冒頭は、「予は下野の百姓なり」<sup>(8)</sup>という言葉から始まっている。この百姓という言葉については、正造が農業者という意味ではなく、村人や民衆という意味で理解していたのであろうと考えられる。また、同時に正造が百姓としての立場に身を置きながらも自らを百姓の代表として意識して表明した言葉でもあったと考えられる。

正造は、六角家騒動以降、百姓としてではなく政治家として生きることになるが、その政治家としての正造が、足尾銅山鉍毒問題と闘って、やがて政治家を捨てて天皇に同問題で直訴した後に谷中村に入って、再び正造は百姓になる。百姓として鉍毒問題と向き合う。60歳を越してからの、言わば「新規」の百姓（それも住み家を持たぬ小作人のような）となった田中正造は、谷中村の農的生活そのものが鉍毒問題に対する闘いであること知る。

もちろん、明治期の谷中村のような伝統的農業を営む暮らしは、鉍毒さえなければ有機農業そのものであった。谷中村民の農的生活による足尾銅山の鉍毒に対する静かな闘いは、鉍毒という近代化思想から有機的生活を守ろうとするものであったといえる。田中正造の農業観は、こうした有機的生活を営む農村像に立脚していたと思われる。

### (2) 田中正造の生命観と共生の思想

田中正造は、足尾銅山の鉍毒問題に対して、当初は財産に対する侵害という視点で反対運動を展開した。しかし、その後鉍毒の激化に伴って死者を含む健康被害が増加する、正造の鉍毒問題に対する考え方は、財産権から生命権の侵害と捉えるようになってくる<sup>(9)</sup>。とりわけ、政府が被害民の

「押し出し」という請願行動を暴行・弾圧した川俣事件(1900年)は、正造に大きな衝撃を与えるものだった。この時、正造は、鉱毒問題の本質が生命軽視を生み出す経済優先主義による近代化社会の構造にあったことを自覚したといえる。

正造は、鉱毒問題が予防工事などの表面的な対策で解決されるようなものではなく、鉱毒の原因そのものを止めなければならないと考えた。国会や政府には鉱毒問題を解決して人民を救う意志のないことを知った正造は、1901年、明治天皇に直訴することで世論に訴える行動に出る。

正造にとって、天皇への直訴状(幸徳秋水の筆)に加筆した「加毒の鉱業を止め」という一文こそが鉱毒問題の解決の根幹だったと考えられる。田中正造の生命観は、「非命の死者」(天命を全うできずに亡くなる者)を出さないという、人権の根本の生命権こそ社会の最優先課題であるということにある。

欧米の列強国と肩を並べるべく富国強兵、殖産興業を掲げた明治の日本の近代社会の裏側では、常に犠牲を強いられる「非命の死者」が存在し、その多くは農民や工夫という最下層で社会を支えている人々であった。正造にとっては、この人々の生命こそ最優先すべきものであり、この人々こそ国家なのである。正造は、鉱毒や戦争によって「民ヲ殺スハ国家ヲ殺スナリ」<sup>(10)</sup>(1900年)と言っている。

1920年頃には、古河銅山(株)は、足尾銅山で行っていた銅精錬の副産物利用により、日本の登録農薬第一号となった砒酸鉛の工業化に成功し、古河電気工業(株)農業薬品製造所を創った。この農薬製造所は1928年に日本初の農薬メーカー「日本農薬株式会社」となって現在に至っている<sup>(11)</sup>。

田中正造の時代が過ぎても、鉱毒は残り、現在でもその被害は続いている。さらに、現代では農民自らが農薬と化学肥料という名の「鉱毒」を撒き散らす存在となってしまった。筆者は、農民が自らの「鉱毒」を止め、有機農業を広めて生命の尊重される豊かな社会を創ることこそが田中正造の遺志を受け継ぐことにほかならないと思う。

### (3) 田中正造の自然観と循環の思想

田中正造が第1回の帝国議会の衆議院議員に当選した1890年(明治23年)、渡良瀬川が大氾濫を起こし、一気に鉱毒問題が激化した。正造は、その性格上、またその思想上、人民を苦しめる問題を捨てておけないだけでなく、その問題の解決をあきらめることはできなかった。

正造は、足尾銅山の鉱毒問題が、単なる鉱山や工業の問題ではなく、山河を含む自然全体の破壊を引き起こす問題であると認識していた。正造にとって山や川は自然の恵みの原点であって、百姓である人民のみならず全ての人間は山と川の恵みなくしては生存ができないものとして捉えていた。鉱毒は、その最も大切な河川を百姓から奪い去ったのである。いや、奪い去ったのみならず、恵みをもたらすはずの河川が、人民を苦しめる鉱毒を撒き散らす災いへと変えられてしまったのである。

正造は、河川調査に取り組む中で、山や川の自然を破壊し人民に災いをもたらす元凶が、足尾銅山だけでなく、近代化の名の下に山河を破壊する明治政府の存在にあることに行き着いていた。古来より、山河は住民の共有財産として管理され守られてきていた。江戸時代の徳川幕府でさえ、目先の利益を抑え森林の保護育成に努めてきた。しかしながら、明治政府は、国有林や国立公園として山林を囲い込み、奪い取り、河川法で川から民衆を追い出した。いわば、法治国家としての明治政府が、法律を制定して民衆から山河を奪ったといえる。しかも、それらの山林は、足尾銅山等の鉱山を持つ財閥や資本家に安く提供されもした。

田中正造の自然観を端的に表した言葉が残されている。それは、「真の文明ハ、山を荒さず、川を荒さず、村を破らず、人を殺さざるべし」<sup>(12)</sup>(1912年)という有名な言葉である。正造は、鉱毒はもちろんのこと、いかなる理由をもってしても、「山を荒し、川を荒す」行為を許せなかった。山が荒れ、川が荒れることは、村が荒れることに直結するからであり、それはすなわち、人々を「非命の死」へと追い落とすことにほかならなかったからである。ここに、人間の都合で悠久の大地



を汚してはならないとする、自然循環を優先し尊重した田中正造の思想がみてとれる。

#### (4) 田中正造の平和思想

田中正造の平和思想は、徹底した非暴力の思想に支えられている。正造の非暴力主義は、獄中で受けた拷問や暴行の非人道性を身に染みて感じていたからであろう。

日露戦争直後の戦勝に沸く状況において、正造は今こそ「世界各国皆海陸軍全廃を希望し且つ祈る」<sup>(13)</sup> (1904年)とし「海陸軍全廃ハ極端な無抵抗ニあらざれば功なし。無抵抗の極ハ抵抗ニ優る」<sup>(14)</sup> (1913年)と訴える。軍備の増強という暴力による威嚇の平和ではなく、武力そのものを否定することによって戦争そのものの消滅を求めたのである。

田中正造は、私欲を超えた人間であった。私欲を超えて「一身以って公共に盡す」<sup>(15)</sup> (1895年)とし、その生き方を貫いている。公共とは自然と共に生きられる自給的世界そのものである。田中正造は、「農ハ土なり、土地ハ不動産なり。又土より生ずるものを食す。即ち土を食ふ。土ニ生活せる虫即ちみずの如し。みみづハ又土の汁を食ふ。みみづニ対し土を奪へ、金を与ふれば死す」<sup>(16)</sup> (1907年)とし、何もなければ、「貧しと云う文字もなくならん。茲ニおるてはじめて天国ハ皆我物たりと云ふ事をさとれり。うれしき御事ニて候」<sup>(17)</sup> (1909年)としている。

私欲が暴力を生み、戦争へ駆り立て、環境を破壊する。正造は近代文明が私欲を増大させることを見抜き、自給を基礎とした公共の思想が世界平和を築くと考えた。これは、一楽照雄が「重要なのは、人と人のつながりを基礎にした国内自給であって、これこそが世界平和の基礎条件です」<sup>(18)</sup>とすることとも共通する。

### 3 有機農業と宮沢賢治<sup>(19)</sup>

宮沢賢治は近代農法の推進者であり、その農法は有機農業ではないというのが通説である。それは、例えば、賢治の詩「あすこの田はねえ」<sup>(20)</sup>

(1927年)や賢治が農民のため無料の肥料相談を行なった「施肥表」<sup>(21)</sup> (1928年)において、化学肥料である「硫酸」や「過磷酸」を使用し、また、当時の稲の新品種であった「陸羽132号」を推奨し、多収穫を目指す稲作指導を行っていたことによるようである。このことをもって、「宮沢賢治は有機農業ではない」とするのは容易であろう。

化学肥料や農薬が登場して間もない時期に、その問題点を看破することは難しいが、賢治は、その農薬が登場して間もないときに、農薬の問題点を演劇作品「植物医師」<sup>(22)</sup>に盛り込んでいる。「植物医師」は、賢治が稗貫農学校の教師時代の1924年に、学校で生徒が上演した。「それはね、亜硫酸という薬をかけるんです」と言って、偽植物医師が農民を次々と騙し、陸稲に亜硫酸を散布させ陸稲を枯らしてしまうというものである。この作品に登場する亜硫酸が当時農薬として販売されていたが、「どごで売ってるべす」という農民の台詞から、当時、農薬があまり普及していなかったことがうかがえる<sup>(23)</sup>。前述の足尾の古河銅山から生まれた日本農薬株式会社による硫酸鉛の販売は1922年からである<sup>(24)</sup>。この「植物医師」については、植物医という先見的な発想も評価されるが、同時に、賢治は、そこで農薬による薬害や経費負担の増加などの農薬批判を明確に行っているのである。

また、賢治は、自らの就農に対する決意表明である『農民芸術概論綱要』<sup>(25)</sup> (1926年)で示している思想や自給と提携を目指す営農姿勢は、後述するように有機農業そのものと言わねばならない。

#### (1) 宮沢賢治の農業観の変遷

宮沢賢治は、1896年(明治29年)8月27日、岩手県稗貫郡里川口村(現在の岩手県花巻市)の大きな商家の長男として誕生した。宮沢家は地主として農地も所有していたが、賢治は農業とは無縁の世界の住人であった。その賢治が自ら農民として生きる道を決意する過程は、宮沢賢治の思想の変化と成熟によるものであったと思われる。

賢治は、盛岡中学から1915年(大正4年)盛岡高等農林(現在の岩手大学農学部)に進学する

が、そこで、賢治は、土壤肥料学研究室に籍を置くことになる。賢治が盛岡高等農林で土壤肥料学という農業の基礎的事項を学んだことは重要であり、またそこで生涯の親友となる保坂嘉内と出会うことにもなる。保坂は中途退学させられるが、郷里の山梨県で農場を開いている。賢治は、卒業後、研究生となって岩手県中の土壤調査を行なっている。こうした土壤調査の実績が、後の賢治の肥料相談活動に活かされることになる。

研究生を修了し自家に戻った賢治だが、家業の商売に熱中する気になれず、法華経の世界にのめり込む日々を送っていた。1921年（大正10年）1月、賢治は、突然家出をして上京する。この年の8月まで、賢治は、東京でアルバイトをしながらトランク一杯の童話の原稿を書いたと言われる。同年8月下旬、妹トシの病気のため、花巻に帰った賢治は、同年12月から稗貫郡立稗貫農学校の教師となる。

この農学校での教師生活は4年半であるが、この農学校の教師時代に賢治は厳しい農業の現実を知ることになる。しかし、同時に筆者には、賢治がこの厳しい現実の中に大きな希望の芽を感じ取ったであろうと思われる。

1925年（大正14年）には、賢治は、自ら農業を実践する決意を固めている。その決意を、保坂嘉内宛ての書簡において、「来春はわたくしも教師をやめて本当の百姓になって働きます」<sup>(26)</sup>と記している。そして、その決意通り、賢治は、1926年（大正15年）4月から花巻の郊外にある宮沢家の別荘に住み、「新規就農」を果たすのである。

賢治のまとめた『農民芸術概論綱要』（1926年）には、その就農に当たっての賢治の農業観が集約されている。「おれたちはみな農民である」、「もっと明るく生き生きと生活する道を見付けたい」という賢治が求めた農業は、「灰色の」労働から生命の織りなす創造芸術への飛躍を意味しているといえよう。賢治は、農民芸術の本質について、「農民芸術とは宇宙感情の地人個性と通ずる具体的な表現である」<sup>(27)</sup>という。「宇宙感情」とは「天地自然」の表現にほかならないであろう。

## (2) 宮沢賢治の生命観と共生の思想

宮沢賢治の生命観を形成したのは仏教であることに間違いない。賢治は法華経を熱心に信仰したが、決して法華経以外の宗教を排除したわけではない。いずれの宗教もその本質は生命観の表現形態といえる。

賢治は、『農民芸術概論綱要』の序論において「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」、「自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する」としている<sup>(28)</sup>。このことが賢治を「全体主義者」と評する見解もあるが、そうではない。これは、総合的共生的な生命優先の文明社会を目指す考えであり、そのことは、それに続く「新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある」という文言からも分かる。

賢治は、詩集『春と修羅』（1924年）の序において、「わたくしといふ現象は 仮定された有機交流電燈の ひとつの青い照明です（あらゆる透明な幽霊の複合体）」<sup>(29)</sup>としている。個々の生命の本質は、物体ではなく表現された“関係”であり、それは単独ではなく、時間的にも空間的にも繋がっている関係として受けとめられている。

こうした賢治の生命観においては、自己と他者の境界は取り払われ、さらに動植物と人間の境界も、自然界のすべての物体と自己の境界も取り払われることになる。

## (3) 宮沢賢治の公共と提携の思想

宮沢賢治の有名な詩に『雨ニモマケズ』<sup>(30)</sup>（1931年）がある。正確に言うと、これは詩ではなく手帳に書き留められたメモである。筑摩書房の文庫版『宮沢賢治全集』でもメモとして掲載されている。そして、この『雨ニモマケズ』の一般的理解は、「忍耐の美德」であるかのように解釈されることが多い。しかし、このメモの真意は「欲ハナク 決シテイカラズ」であり「アラユルコトヲ ジブンヨカンジョウニ入レズニ」であり、「ヨク ミキキシ ワカリ ソシテ ワスレズ」にも拘わらず、「ミンナニ デクノポートヨバレ」ることを理想とするのである。賢治自身は、必ず

しもこのメモのように「決シテイカラズ」であったわけではないが、『雨ニモマケズ』の文面からは、賢治が私欲を捨て東奔西走したことは、世界と自己とが一体化した公共の思想を持っていたと考えられる。

また、宮沢賢治は、『農民芸術概論綱要』の中で「都人よ 来ってわれらに交われ 世界よ 他意なきわれらを容れよ」<sup>(31)</sup>と結んでいる。近代社会が発展するにつれて、都会と農村、個人と個人が分断され、経済という冷たい鎖だけでつながれる。近代化する社会の過程で分断された絆を回復し、安全で豊かな社会を築く思想が前述の「提携」であるが、この『農民芸術概論綱要』での結びにおいて、賢治が生産者（農村）と消費者（都人）の「提携」を視野に入れていたと筆者には思われる。

## む す び

晩年、田中正造は、「世界人類の多くは、今や機械文明というものに噛み殺さる」<sup>(32)</sup>（1911年）とし、「物質上、人工人為の進歩のみを以てせば社会ハ暗黒なり。デンキ開ケテ世見暗夜となれり。然れども物質の進歩を恐るゝ勿れ。此進歩より更に数歩すゝめたる天然及無形の精神的発達をすゝめば、所謂文質彬彬知徳兼備なり。日本の文明今や質あり文なし、知あり徳なきに苦むなり。悔改めざれば亡びん。今已ニ亡びツゝつあり。否已ニ亡びたり。」<sup>(33)</sup>（1913年）としている。

これは、まさしく近代文明の批判であり、現代文明への批判でもある。足尾銅山の鉍毒公害以来、数々の環境汚染が引き起こされた。そしてさらに、東日本の震災による原発事故が放射能を飛散させたことをみれば、この正造の言葉は、私たち自身にも向けられている。

田中正造や宮沢賢治は、近代社会の経済優先主義によって人間の生活や自然環境の破壊が行なわれている実態に直面し、「共生」・「循環」・「提携」の思想による有機的な社会を構築しなければ、「真の文明」はなく、したがって「世界がぜんたい幸福に」なることはないと明確に表現した。先

に述べた有機農業の思想の本質である「共生」・「循環」・「提携」の思想は、すでに日本の近代思想の中に芽生えていたと考えられる。

英国人のアルバート・ハワード（Albert Howard）は、インドの伝統的農法の堆肥づくりを基礎にした持続的農業を1940年に『農業聖典』に著し<sup>(34)</sup>、欧米のOrganic farmingの創始者となったが、日本の有機農業は、その概念の導入と見られる向きもある。しかし、その『農業聖典』が著されるよりも前から、日本の伝統的農業には、持続的な土づくりの技術があったのみならず、田中正造と宮沢賢治には、これまで論じてきたことから分かるように、すでに日本の有機農業の思想である「共生」・「循環」・「提携」という思想が芽生えていたことは明らかであろう。

## 《注》

- (1) 一楽照雄（1906-1994）の思想・考え方については、その生涯の著作を集めて整理した『暗夜に種を播く如く』（日本農業研究会発行、農山漁村文化協会発売、2009年）を参照されたい。
- (2) 日本有機農業研究会の「有機農業に関する基礎基準」は、同研究会のホームページを参照されたい。（<http://www.joaa.net/mokuhyou/kijun.html>）
- (3) 本稿の田中正造の生涯等に関する記述は、基本的に本稿末尾の参考文献に基づく。
- (4) 黒沢西蔵（1885-1982）は、北海道製酪販売組合（後の雪印乳業）、酪農学園大学の設立者である。
- (5) 『田中正造全集』第9巻、岩波書店、1977年、434-435頁。
- (6) 小西徳應編『田中正造の世界7』御茶ノ水書房、1987年、37-38頁。
- (7) 『田中正造全集』第19巻、岩波書店、1980年、133頁。
- (8) 『田中正造全集』第1巻、岩波書店、1977年、3頁。
- (9) 小松 裕『田中正造』筑摩書房、1995年、47-50頁。
- (10) 『田中正造全集』第8巻、岩波書店、1977年、258頁。
- (11) 松中昭一『日本における農業の歴史』学会出版センター、2002年、219頁。
- (12) 『田中正造全集』第13巻、岩波書店、1977年、

- 260 頁。
- (13) 『田中正造全集』第16巻，岩波書店，1979年，246 頁。
- (14) 前掲『田中正造全集』第13巻，443 頁。
- (15) 前掲『田中正造全集』第1巻，91 頁。
- (16) 『田中正造全集』第11巻，岩波書店，1979年，77 頁。
- (17) 前掲『田中正造全集』第11巻，347 頁。
- (18) 前掲『暗夜に種を播く如く』，310 頁。
- (19) 本稿の宮沢賢治の生涯等に関する記述は，基本的に本稿末尾の参考文献に基づいている。
- (20) 文庫版『宮沢賢治全集』第2巻，筑摩書房，1986年，116 頁。
- (21) 文庫版『宮沢賢治全集』第10巻，筑摩書房，1995年，553-554 頁。
- (22) 文庫版『宮沢賢治全集』第8巻，筑摩書房，1986年，408-422 頁。
- (23) 加藤治郎『東北稲作史』宝文堂，1983年，356 頁。岩手県『岩手県農業史』熊谷印刷出版，1979年，812-813 頁。
- (24) 松中昭一『日本における農業の歴史』学会出版センター，2002年，219 頁。
- (25) 前掲文庫版『宮沢賢治全集』第10巻18-26 頁。
- (26) 文庫版『宮沢賢治全集』第9巻，筑摩書房，1995年，288 頁。
- (27) 前掲文庫版『宮沢賢治全集』第10巻，20 頁。
- (28) 前掲文庫版『宮沢賢治全集』第10巻，18 頁。
- (29) 文庫版『宮沢賢治全集』第1巻，筑摩書房，1986年，15 頁。
- (30) 前掲文庫版『宮沢賢治全集』第10巻，50-52 頁。
- (31) 前掲文庫版『宮沢賢治全集』第10巻，19 頁および23 頁。
- (32) 『田中正造全集』第12巻，岩波書店，1978年，426 頁。
- (33) 『田中正造全集』第13巻，岩波書店，1977年，532 頁。

- (34) アルバート・ハワード著・保田茂監訳『農業聖典』日本有機農業研究会，2003年。

## 参考文献

### 田中正造関係

- [1] 赤上 剛「直訴論の再検討」『田中正造と足尾鉾毒事件研究14』随想舎，2006年
- [2] 荒畑寒村「土から生まれた思想家」『季刊田中正造研究2』伝統と現代社，1976年
- [3] 飯沼二郎「地主・農民・キリスト教」，小西徳應編『田中正造の世界7』御茶ノ水書房，1987年
- [4] 小松 裕・金 泰昌編『公共する人間4 田中正造』東京大学出版会，2010年
- [5] 小松 裕『田中正造』筑摩書房，1995年
- [6] 小松 裕『真の文明は人を殺さず』小学館，2011年
- [7] 田中正造全集編集会『田中正造全集』全19巻別巻1，岩波書店，1980年
- [8] 林 竹二『田中正造の生涯』講談社，1976年
- [9] 松中昭一『日本における農業の歴史』学会出版センター，2002年

### 宮沢賢治関係

- [10] 宮沢賢治，文庫版『宮沢賢治全集』全10巻，筑摩書房，1995年
- [11] 加藤治郎『東北稲作史』宝文堂，1983年
- [12] 岩手県『岩手県農業史』熊谷印刷出版，1979年

### 有機農業関係

- [13] 一楽照雄『暗夜に種を播く如く』農文協，2009年
- [14] 館野廣幸『有機農業・みんなの疑問』筑波書房，2007年
- [15] 涌井義郎・館野廣幸『解説・日本の有機農法』筑波書房，2008年